慶讃法要と領解文

親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要が三月二十九日から本山西本願寺で始まりました。

五期三十日間、全国からご勝縁に会おうと多くの門信徒の皆さんが本山に集われます。

金光寺を含む高千穂組の参拝日は五月十一日。五月九日から二泊三日の日程で総勢三十九名団体参拝に向かいます。

親鸞聖人が八百五十年前、お生まれになり、法然聖人と出遇い、百日の参籠を縁として阿弥陀さまの念仏一つの救いに帰依をされたこと。

御本典『顕浄土真実教行証文類』を著わされ、浄土真宗の立教開宗がなされたこと。

この親鸞聖人のご誕生と立教開宗の二つがあって、今、私たちは阿弥陀さまから賜る他力の信心、お念仏一つで救われるご縁を賜ります。

本年はご誕生と立教開宗の慶讃法要が執行されるおめでたい年ですが、その法要を前にした本年一月十六日専如ご門主は「新しい領解文（浄土真宗のみ教え）」のご消息を発布され、あらゆる場で唱和しましょうとすすめられました。従来あった蓮如上人が制定されたとされる『領解文』、若い人達に伝わりにくいとのことで、若い人達に伝わりやすい現代語版領解文の制定が掲げられたのは二〇〇五年にさかのぼります。それから十八年、この度の慶讃法要に間に合わせるかのようにバタバタと「新しい領解文」のご消息は発布されました。

私はこのご消息は問題を含んだものであると受け止めています。また、全国でも同じ思いを持つ人達が多数いらっしゃいます。

そもそも「領解」とは一体何なのでしょうか。

領解とは『浄土真宗辞典』によれば、「領納解了の意味で、如来の勅命を受け取り、勅命のとおり、その道理を理解して身につけることをいう。浄土真宗では安心・信心の異称として用いられる場合もある」とあります。

蓮如上人は常々法義の領解について自らの心中を包みかくさず申し述べることが重要であるといわれ、古来、本願寺の報恩講へ参拝した折に親鸞聖人の御真影の前において改悔の心を起こし、回心懺悔してその心中を諸人に語ってきました。これにより、本願寺の報恩講における信仰告白は重要な儀礼として定着することとなり、この際、各人が三々五々に口述していたのを混乱を避けるため、蓮如上人によって改悔の言葉が『領解文』として定められました。

さて、新しい領解文が正しい改悔の心中告白ならば、何ら問題はないのですが、いくつか問題を含んでいると思います。今回は特に問題があると思われる点について述べます。

「新しい領解文」の中に

私の煩悩と仏のさとりは
本来一つゆえ

との文言があります。

仏さまの側から、救う衆生の苦しみ（煩悩）を仏の苦しみとは言えますが、私の側から私の苦悩（煩悩）と仏さまのさとりが一緒とは言えるはずがありません。

私の煩悩と仏のさとりが本来一つなら私たちはすでに悟っていることになります。悟っていないから悩み苦しむのだと思います。そして、この煩悩は親鸞聖人の仰せをいただけば

臨終の一念にいたるまで
とどまらずきえずたえず

なのです。

浄土真宗の宗意安心に反する「新しい領解文」を私は唱和することができません。

専如ご門主が考えられたご消息とはとても思えず、取り巻きの人の中から考え出されたものとしか思えません。

他の問題点は次号に書きたいと思います。

法語の世界

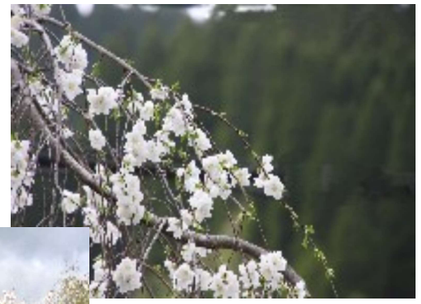
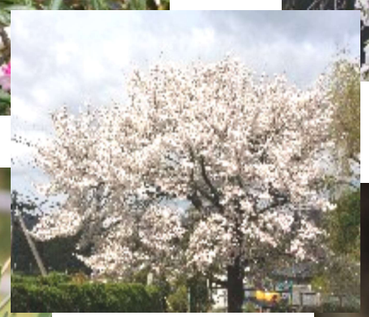
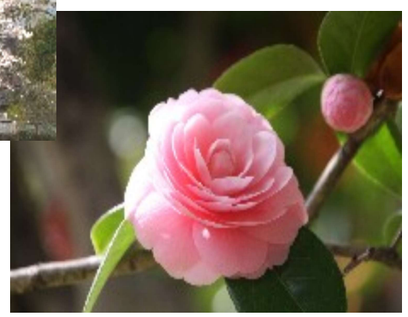
《原　文》

前々住上人、大坂殿にておのおのに対せられて仰せられ候ふ。一念に凡夫の往生をとぐることは秘事秘伝にてはなきかと仰せられ候ふと云々。

（『蓮如上人御一代記聞書』二百八十三）

《現代語訳》

大坂の御坊で、蓮如上人は参詣の人々に対し、「信心一つで、凡夫の往生が定まるというのは、何よりも深遠な、秘事秘伝のみ教えではないか」と仰せになりました。

《用語の解説》

秘事秘伝……深遠な教え。奥深い教え。ここでは秘事法門といわれる異義で用いられる秘事秘伝の語を逆手にとっていう。